

富山県猿害地域における地域住民のニホンザル観の研究 (その2)

竹内 潔・佐々木重洋 (富山大学人文学部)

昨年度に引き続き、富山県東部の大山町、上市町、立山町において、猿害の現状に関する調査をおこなうとともに、地域住民のニホンザルに対する意識態度および猿害を通じて形成されたニホンザルのイメージに関する詳細な聞き取り調査をおこなった。

地域住民はニホンザルの外見や行動、その社会などを正確に観察している反面、ニホンザルを獣と人間の狭間に位置づけられる境界的な存在としてとらえているため、これに人間的な行動上の特徴を過大に見いだしている。その結果、地域住民が語るサルは、動物行動学的見地からみれば実際には不可能と思われるようなこともやってのける存在となっている。すなわち、猿害を通じて地域住民のあいだで形成されたニホンザルに対するイメージは、サルに関する科学的知識とはまったく無関係に、猿害の現場において、人間の想像力をもとないながら手探りで再生産されているのである。興味深いのは、こうした地域住民によるニホンザル観のあり方やその形成過程が、人間の異民族・異人種観や他者表象のそれに通底する側面をもつことである。

猿害はこれまで、どのようなサルの管理方策がサルの保護と農作物の被害防止を両立させ得るかという観点から取り上げられがちであった。しかし本研究は、猿害が人間にとっての異民族・異人種観や他者表象の問題、とりわけそれらの形成過程やメカニズムを考えるうえでも重要な比較対象の題材となり得ることを示唆した。この視点のもとに、民族学・文化人類学の成果をふまえて研究をさらに深化させていくことが今後の課題である。

マカクザルオスの生殖機能に関する組織学的研究 長戸康和、榎本知郎(東海大・医・形態)、松林清明(京都大・霊長類・サル施設)

【目的】前年度には、ニホンザルと他のマカクザルを比較するための基礎として成熟したカニクイザルの精巣組織の特徴について検討した。今年度は、ニホンザル・カニクイザル・アカゲザルの精細管上皮、とくに精子形成過程における先体顆粒の形態的特徴について観察した。

【方法】試料は、実験殺で得られた精巣を細切して用いた。細切した試料は、直ちにホルムアルデヒドとグルタルアルデヒドの混合液に浸漬し、固定した。その後、水洗・脱水し、親水性メタクリル樹脂混合液 (HPMA-Quetol 523-MMA) で包埋後、1~2ミクロンの組織切片を作製した。切片にはH-EあるいはPAS染色を施して観察した。【結果】1) 3種とも精上皮の周期は10段階に分けることができた。

2) A型精祖細胞には、3種類 (dark type, pale type およびその中間型) のタイプが認められた。

3) B型精祖細胞は、カニクイザルでV~VIIを除く各期に認められ、出現時期が最も長い。

4) 精子形成過程における精細胞の先体顆粒の形態について検討した結果、カニクイザルの先体顆粒は大きく、ニホンザルやアカゲザルでは小さいことが明らかになった。また、カニクイザルの先体顆粒は明瞭なPAS陽性を示し、head cap に分化した後にも強い反応が観察された。

【結論】以上の結果から、B型精祖細胞の出現時期や先体顆粒の違いがカニクイザルの活発な造精機能と関連していることが示唆された。今後、さらに他の霊長類でもこの点について検討していきたいと考えている。